

廣益俗說辨正

殘編

人物文字言語
器物衣服藥種
食物居處禽獸
魚蟲艸木俗書
俗語或問

13

954

21

廣益俗說辨義編四十三目錄

○雜事 人物俗諺

補 五月五日ふせり子い親よわさけり云々

補 諱及名乃從

補 名字補遺

補 源内平内名れ名の從

補 監物太局監物乃名乃從

補 朝起の家は福あり云々

補 物あやふ從

補 金神乃從

○雜事 居所

補 丹波國時平屋敷の役

○雜事 佛家

補 大改石地蔵の役

○雜事 文字長倍増

補 石紙くくとしむ役

補 船の字はさみしすむしむ役

補 定家一字の謠の役

補 野る臺ハ陽煙とつゝ役

○雜事 禽鳥

補 五位路鳥の役

補 黄鳥寫をうぐしとと云役

補 郭公鷓鴣をうぐしとと云役

○雜事 魚蟲

補 鯉とつゝとつゝ役

補 石皮明殻を門ハ掛か役

○雜事 草木

補 牡丹とつゝとつゝ役

補 杜若をかきけとつゝ役

補 奥列ハ菖蒲をねねかつゝ用か役

○雜事 花鳥

廣益俗說辨義編四十三

肥後隈本 井澤節長秀輯錄

○雜事 人物 俗諺

^補五月五日ふけり子に親あてけり云云

俗説云五月五日ふけり子に親あてけり云云其長戸

りふけり。親乃るふあてけり

今按れ。大に非なり。寛平帝^{字多}貞^{天白王}

觀八年五月五日降誕。承平二年七月

十九日崩御^{キヨ}六十六。扶桑略記^{モリヤク}云云

りふけり。五月五日ふけり

くろく孟嘗君曰。人生受命於天乎。將受命於戸耶。必受命於天。何憂焉。必受命於戸。則高其戸耳。誰能至と。し。史記漢書より。確言と謂はる。

補

諱及名乃從

佐

同諱及名と云々。於者あり。

諱桓武天皇。延暦四年五月。詔曰。臣子之禮。必避君諱。頃者先帝御名及朕之諱。公私觸犯。猶不忍聞。自今以後。宜並改。

避續日本紀

桓武天皇諱山部。今改山部姓。

曰山按

日本後紀

光仁天皇諱白髮。今改白。

髮姓為真髮部。

同書

仁明天皇諱神野。

今改伊豫國神野郡為新居郡。

實錄

寬元帝

後漢

諱邦仁。以經史所載。因。

訓久爾多美。

○建治帝

後宇

諱世仁。以。

經史所載。世人訓世。乃比登。又訓比等。

歷代實錄

本朝編年錄

藤原不比等曰。史。

○

藤原馬養曰。宇。

合

續日本紀。懷風藻。作馬養。○系圖。

○

橘廣相。

曰博覽。鴻田忠臣曰達音。紀長谷雄
 曰發昭皆音訓通用也。○安倍仲滿
 或記仲麻呂滿麻呂音之轉也。賀茂
 姓補慶滋姓者以賀茂二字訓與之
 計混之慶滋者也

補

名字補遺 今輯拾芥抄和爾雅節用集末載
 者補其遺闕大概擬名字抄而巳

イ 居 三條帝病負○神皇正統記 居 盛衰記 井
 續日本後紀 典泉五 紀五

庭 ト 偕徒識敷駿早速迅訓常 常行 薩戒
 記 執饒茂 後堀河 常 親王 間迫 小巳

老 大中臣 カ 叵馬攝統克養薰揖 令
 頭 龍刷 藤刷雄 利 夕 三繩薩陟徑達止
 崔 崇嶙 乙 藤乙殿 谷勝耐断勇皇 ン

漆 漆洲 ツ 俊弟禮土葛結編 ナ 發音
 熟 勢 橘逸勢 體 近衛帝 引 ラ 良 一條 公
 室 兵 藤兵雄 概臆梁 上 宇 占 裏 内 條

内 經 ノ 悠延 沼田 騎文 夕 管 方 ヤ 八 樂 二
 逸 朝野群載○橘 猿真卷 フ 成 後土御門 三 凝
 大伴 以茲同政 後水尾 言 尾張 健 伴健峯○江
 熊凝 自 源 自 五 江兄柯柄 テ 平 ア 發鏡 彰

自 源 自 五 江兄柯柄 テ 平 ア 發鏡 彰

古者。豈物以類。といひ。古者。の爵。は。任。で。る。
人。の。子。女。は。古。者。の。爵。を。承。け。る。古。者。の。爵。を。承。け。る。
つ。ち。に。同。書

補 釈 記 の 家 福 来 る 云 語 の 後

俗。從。之。然。る。や。く。記。さ。ば。家。富。と。云。俗。人。
今。按。る。ふ。初。め。の。中。に。記。さ。る。家。富。と。い。ふ。は。
家。富。家。に。早。く。起。り。あ。り。聞。見。後。録。曰。
浙。人。謂。富。家。為。起。早。蓋。言。錢。多。則。事。
多。不。能。晏。眠。也。雖。俗。下。之。語。亦。有。理。
云。云。上。家。富。者。と。い。ふ。の。の。り。

か。て。富。か。い。な。く。多。く。は。人。偏。に。遠。く。
少。く。い。な。く。富。の。の。り。程。史。曰。昔。
有。一。士。鄰。于。富。家。貧。而。屢。空。每。羨。
其。鄰。之。樂。且。日。衣。冠。謁。而。請。焉。富。翁。
告。之。曰。致。富。不。易。也。子。歸。存。三。月。而。
後。示。告。子。以。其。故。如。言。後。謁。乃。命。
侍。于。屏。間。設。高。几。納。師。資。之。贄。揖。
而。進。之。曰。大。凡。致。富。之。道。當。先。去。其。
五。賊。五。賊。不。除。富。不。可。致。請。問。其。目。
曰。即。世。之。所。謂。仁。義。禮。智。信。是。也。士。

盧胡而退、あり。け富翁がなぐみたり

補 物ゝのやうなうし役

俗間抄小あやうしやうしやうあり

今按う小。菲雪録曰。樊昌高八合家軒
坪之間畜龜數年生育至二百餘其家
産子五人皆龜胸偻蓋孕婦感其
氣所致又至正末越有夫婦於之善寺
金剛神側縛茅席而居其婦産一子
前有兩肉似角類所謂夜叉蓋産婦
依止寺偶便稟得此形。夢溪筆談曰

菜品中蕪菁松芥之類遇早多結

成花如蓮花或作龍蛇之形熙寧年

李賓客及之知潤州園中菜花悉成

荷花仍各有一佛坐于花中形如雕

刻李君之家奉佛甚篤因有此異

とるゝゝゝ其れ其れとるゝゝ感

癖とるゝゝ因。故惟わゝ年おひじ

補 今種乃後

俗間。今種れ方。二年ふさぐとかなぐりつる
あり。其外方角といふ日取ゆゑなり

今按ふ者、ムカシ道人号青蛇ヒヤツコ、白虎シユ、朱雀シヤク、玄武ヘン、神カミをまつる。今作は西方サイハシ白虎神なり。萬斛マンコク明珠メイジュ曰。西方金神左耳有青蛇セイニヤ、面目有毛虎モク爪ツメ執ツク鉞セツ。○山海經ヘンカイ圖ツ讚サンニ曰。西方蓐收ニョクニウ金神白毛虎コモヲ爪ツメ執ツク鉞セツ。西域イキ房陵バウレウ間有白虎神ヒヤツコ好飲人血コニテラノム。○吳コ地記チキニ曰。虎岳コガク山金精ニコン化為白虎ケタ。○國語コクゴニ曰。魏公夢有廟リベタ有神人面ニ白毛虎クケアリ爪ツメ執ツク鉞セツ。西方白虎金正官クニ。五雜俎オノミ曰。陰陽家。歲破。歲殺。歲刑。災殺。太歲將軍。却

職。金神○戊申立春考曰金神在申。
 畢家必用曰年上金神魁授官本日
 日本に金神と傳ふ者ありて其事よくては。
 あらう紙にぬりてこれ金神を忌めたり。
 キモンクン 安南國をこ日本之事よくあるは
 鬼門関は破軍星に向ひて勝負紙とん土用
 は破軍星に向ひて勝負紙とん土用
 ツチは去るころさだ方角をいひ日た四取
 カゝ分もあれたそついのちなり。五
 サソソニ サイカ ヒカバ
 雜組曰。西家の東。東家の西此一言足
 テヤフルニ セイ フセリラ チウハ テカノシラ ヒ フマツハ
 以破老一歳之謬矣。紂以甲子亡武王
 テヤフルニ ヨリ タレリ テヤフルニ イン ヨウ イミヲ
 以甲子興此一言足以破陰陽之忌矣

今按石伴ふけらるゝわが石伴ふれ
 外馬く懐くあそび也。括異志曰嘉禾
 北門有石梁橋橋欄四方皆石刻孩兒
 因名之。不知何時所建歲時既久遂出
 為怪或夜出叩人門戶求食或於月
 夜遊戲干市人多見之。一夕有膽勇
 者至夜密伺果見石孩兒徐々自橋而
 下遂大呼有鬼以刀逐至其處研去其
 頭恠遂絶。け類有之同

○雜事 文字并俗語

補 石をちくとよむ後

一書云。延久年中斛器をけくをらる。斛
 は十升なり。石をさげくをけくよつて石
 を斛の音によむ。けく

今按く非なり。夢溪筆談曰。鈎石之
 石。五權之名。石重百二十斤。後人以一斛
 為一石。自漢已如此。今人乃以糲米一斛
 之重為一石。考へ知べし

補 船の字はきくよむと書後

俗傳く。おふく船の船乃字は。きくよむ

や書とあり

今按る。船の字偏つゝとて傍つゝと
と。すしつゝとて。字彙曰。舟職流反
音周。船也。方言曰。自關而西謂之船。自
關而東謂之舟。說文曰。舟言周流也。船
言循也。循水而行也。總名曰船。船とあり。
板村載筆曰。考次。周白の河。五ふの僧
一命。て。謠の抄と作とて。終に。是利
の元。信とて。僧。詩。埤。風。栢。舟。を。栢。と
す。じ。と。け。ひ。て。舟。ハ。議。な。り。と。辨。毛。破。意。と

し書ふありと記して出せしを件の本を
取出さしめ終に。唐李のそむ。舟ハ羞
也。よ。の。之。字。孤。己。グ。書。入。り。ち。り。元。信。面。目
を。失。つ。り。少。建。仁。寺。の。雄。長。老。か。と。終
ま。と。あり。又。黃。帝。の。と。り。船。を。作。と
神。事。ハ。あり。貨。狀。一。人。作。り。と。あり。ハ。あ
ら。ど。雲。笈。上。義。曰。黃。帝。見。浮。葉。為。舟
二。臣。助。為。舟。楫。危。言。曰。黃。帝。作。舟。楫
。額。府。群。王。曰。黃。帝。臣。共。鼓。貨。狀。刻
本。為。舟。刺。本。為。楫。世。本。曰。二。人。と。あり。考

廣文苑

世本曰二人

國遠加美侶伎能宿那毗古那加葦
菅遠殖生志津々國固米造介牟與利
瀛津波紀とわらふ考へあるを

○雜事 禽鳥

補五位路馬乃夜

俗説云延喜帝醍醐天皇神泉苑に幼幸の時
池にけし鷺居くふ。六位とみくみてふ
とく作られ。後人宣旨ぞくしけ。やが
あくなけ。宣旨み後しく。あうを
うそ神妙なり。今うそは鷺の中れ王

ちるぐとて五位よかされ。涉れとるぐ
わそつとて。いぬのき。是うて。五位
鷺とみだけ。是は鷺の涉料ぬあ
らむ。あむ五位の行をあらう。あむ
は。あむ。は。延喜使よとく。あむ。位
用とる。是と。あむ。位。延喜を
評さば。鷺と五位。あむ。位。延喜の
懿云。あむ。を車に載。あむ。位。延喜の
のねを封。見于史記漢書。松譚曰。始皇封
也。武后が嵩山の松と封せ。通鑑新

祿もふき幸にわび。位ハ功たふしを施
 するふきふ。執りて退るるが神妙
 として禽鳥と五位するに結んば功
 わるをば何うあつて結ふべき。王位乃
 行をあらう結んば。乃と字りて。民
 とつてひの殿。魚はまさば可なり
 補黄鳥クワテウとふしとつて後
 俗同クワテウとふしとつて訓

今按ふ。本草綱目ニ鶯大ニ於鸛クワテウ鶴クワテウ雌雄
 雙飛體毛黄キイロ名羽ハ及尾有黒クワテウ名相間

黒眉尖嘴青脚ニ之春後則鳴。○石川大山
 曰。日本無黄鳥ニ誤以割葦ニ為鶯クワテウ覆フク醬ニ
 貝原篤信曰。ウグヒス。或曰婆餅焦ハ也。今按
 婆餅焦ハ中華ニ往々見之。或曰ウグヒス
 ハ。月令廣義ニ所謂報春鳥也。未知何
 是。古来本邦誤テ鶯クワテウヲウグヒスト訓
 ズ。鶯ハ別ノ鳥ナリ中華ニ朝鮮ヨリ推スル
 来ル。後紫ノ海鳩ニモ自ラ来ル大和朱氏
 瑜曰。日本ノウグヒスハ唐山ノ黄頭鳥ニ
 似タリ。日本ニ於テ黄鳥クワテウヲ見ズ。唐山ノ黄

鳥ハ大サ日本ノヒヨドリ程ニテ嘴ト足ハ
赤色身ハ黄ニ羽黒ク其聲甚長クウ
ルハシ舞水 談綺これをもつてるまばクサテツ美鳥と
いふ常といふ日本ハわろるぐらとハわ
らびろるゝ成多一

補

郭公鸛鶴とやゝぎんぐと云從

俗間郭公鸛鶴をほゝぎんぐと訓

今按ふ。日本ノそゝぎんぐといハ杜
鵑なり。郭公鸛鶴もハわろる。郭公鸛
鶴ハ俗といふかつゝゝゝなり。是なり。和

名類聚抄鸛鶴和名保度今之郭公也ト

誤リ記とより。和僧擬作の十王經ノ

鸛鶴鳥示性語鳴別都頼宜壽ト書

ト。そ後より後下字そ用集多んる

ぐいてそを載る。垂加翁曰。杜鵑和

訓係登等藝須書之為霍公為郭

公者國俗之文字而非華人之稱呼

也。故歌人皆用之是也。詩人用之則絶

無而僅有焉。釋遠禪賦郭公是也

節考蓮禪詩予所聞郭公者鸛鶴鳥而

○雜事 魚蟲

補 經と心とを訓ユム從

俗間鯉をうづやくよし。異制を訓多し載
 一書云。わ字少て漢字にわぶとあり
 今按ふ。鯉は日本に多く。五倍かゝるに
 わぶと。わ字少とあり。毛詩疏廣要曰。
 埤雅曰。鯉今云。鯉足也。鱗細有花文
 一名文魚。與蛇通氣。鯉足蛇所化。至

難死^ニ蛇^ニ性^ニ故^ニ或^ニ謂^ニ之^ニ鯢^ニ也^ニ。爾雅^ニ
 鄭^ニ註^ニ曰^ニ。鯢^ニ大^ニ鯢^ニ小^ニ鯢^ニ。註^ニ曰^ニ。即^ニ鯢^ニ也^ニ。爾雅^ニ
 雅^ニ翼^ニ曰^ニ。鯢^ニ魚^ニ圓^ニ長^ニ而^ニ斑^ニ點^ニ有^ニ七^ニ點^ニ作^ニ北^ニ
 斗^ニ之^ニ象^ニ夜^ニ則^ニ仰^ニ首^ニ向^ニ北^ニ而^ニ拱^ニ焉^ニ。○本^ニ州^ニ
 綱^ニ目^ニ曰^ニ。鯢^ニ首^ニ有^ニ七^ニ星^ニ夜^ニ朝^ニ北^ニ斗^ニ有^ニ自^ニ
 然^ニ之^ニ禮^ニ故^ニ曰^ニ之^ニ鯢^ニ時^ニ珍^ニ曰^ニ。形^ニ長^ニ體^ニ九^ニ頭^ニ
 尾^ニ相^ニ等^ニ細^ニ鱗^ニ玄^ニ色^ニ有^ニ斑^ニ點^ニ華^ニ文^ニ頗^ニ
 類^ニ蝮^ニ蛇^ニ有^ニ舌^ニ有^ニ齒^ニ背^ニ腹^ニ有^ニ鬣^ニ連^ニ
 尾^ニ々^ニ無^ニ岐^ニ形^ニ狀^ニ可^ニ惡^ニ氣^ニ臭^ニ醒^ニ惡^ニ食^ニ品^ニ
 所^ニ卑^ニ。終^ニとあやまりて。ハモと訓よりあがり。是又旅
 なり。庖厨和名本草曰。鯢いんぐりあふす。とむる

乃仁言考及魯三

信補

黃帝內經

卷之五

あやういふくづきとてうきふくを
くふりこれとふれはえとくちと後
ゆりといふ俗説の相違をいふ

廣益俗説辨強編四十四終

廣益俗説辨強編四十四遺目録

○雜類 人事

補 息女を娘と書説

補 うげぐみの説

○雜類 文字言語

補 天竺文字孝靈帝沛宇に渡る説

補 者と書説

○雜類 器物

補 虎折鳥帽子の説

補 尺八の説

○雜類 衣服

補 舊苔キウタイの袖スリーブの役

○雜類 藥種

補 香カウのカウの役

○雜類 食物

補 餅モチをからんと云役

○雜類 居處

補 相模サカミ國クニ曾我ソノガ屋敷ヤシキの役

○雜類 禽獸

補 蒙貴モウキ狐コ猫ネコと云役

目録

○雜類 魚蟲

補 硯インの中ナカより龍リウの役

○雜類 草木

補 梅ウメを木母キボといふ役

補 日本ニッポンの海棠カイドウの役

補 女郎ウツナ花ハナの役

補遺

井澤節長秀輯錄

○雜類 人事

補
息女を娘と書ゆ

俗間息女と娘と書るゝあり

今按ふ小非なり 瀾言長語曰娘字俗書古無

當作孀ニヤシ今通為婦人之孀ニヤシト予觀韓カニ魏キ公安

陽集公傳中云。朱宮中称郭公為大娘劉

妃為小娘則皇家亦如此稱之不獨民間

いぢれども。息女は子はいぢれども。ての女といふ

補 ぎげ髪の後

俗間髪とゆふべし。ろよさぐら。ぎげがみと云

今按ふふろこいにも同傳くろこいや延洲筆

記曰倭國婦人不畏足髪長散披在後と

とくろ

○雜類 文字 言語

補 天竺文字考靈帝沛字に後ふ伝

俗間印行の年代記云考灵天皇十三年癸未天

竺文字伝ふ

今按ふ小日本紀舊事紀古事紀多にうて

とくど。妄作ろくろくあり。虎園異制庭

訓云我朝人王二十五代仁賢天皇之沛字善

智法師始傳大唐法門其後欽明天皇用明

天皇西朝深信佛法とあり。仁賢沛字と

佛はの沛じま。諸實録に據るに事也

補 者く書後

俗間書状の末者必件をく書とあり

仲村氏曰續明紀曰正統十四年北敵也先大

舉入寇英宗自征車駕陷沒胡欲殺之伯顔

帖木兒教也先送還之時衆魯皆曰者胡語

云者然辭也。於是得者義矣。否泰錄也。先作野仙と云々霞洞集

○雜類 器物

補 衣折烏帽子ヒタリヨリノエボシの役

俗説云。安ええ年三月中旬。牛若丸鞍馬を
出く。金賣吉次よとあひ。鏡乃宿よとあひ
あつふ。平家方より。け路次と十六七の女人
通る。あふ。あふと出ると。由弘ふれをくる。牛
若丸とあひ。思とゆくとあひ。男になつてりん
として。其つと。烏帽子折エボシの五郎あまといふ。

かりに。其宅よゆと。たり折の烏帽子とおきう
のかうやうて。たかたわとあふ。五郎あまが妻ハ
源氏傳代の郎名。鎌田政清が女子ムスメさじうは。
けたかを見あふ。あまといふ。牛若丸の宿宿よ
りゆと。あふと。いふ。

今按るふ。是ハ頼朝の事を。義経よりいふ
ふ。あふ。源平盛衰記曰。源頼朝の橋よ
り。落ちとあふ。あふ。頼朝のあふ。いふ。
曹カフいふ。あふ。いふ。落人といふ。いふ。

りて烏帽子を著むやや作る。折ぬ一甲
斐園の太左郎といふ。烏帽子商人道々
ゆさゆさ。うの者の土肥次郎實平が家人
なり。烏帽子折くまをよとらむけ
ふ。宿^{シユク}不^{シユク}請^{シユク}ド^{シユク}。酒者出くもては。
酒宴をむぐに烏帽子を箱取ら出で。一お
多^タ八人よまのころ。いそだわつて折^{ツレ}ふ。
七頭^{カレラ}ハ有^リ。一頭ハたり折^{ツレ}なり。あも伏殿
みなる。彩朝あやとふ。七人が烏帽子
を又まゝに結^ツつふ。皆太左郎といふなり。

我身一人いた折^ツりたる。不思議なる。源氏
乃先祖ハ幡敷。たり折の烏帽子と著る。い
ふ。出家代々乃大將軍。たり折の烏帽子也。
今落人れ身とてこれを著る。ハ幡太左郎
乃商人太左郎といふ。て。まをいふ。こ
ろ。末そのりき。まをいふ。て。まをいふ。こ
ろ。又烏帽子をた折^ツつて。黒川道祐^{ユウ}曰
凡^ニ烏帽子前額^{ヒタヒ}。左邊有^ル。右邊有^ル。源家著^ニ
之^ニ。右邊有^ル。四^ニ處者。諸家共用^ニ之^ニ。凡^ニ左^ニ右^ニ之^ニ
内^ニ方有^ル。四^ニ者。是^ニ謂^フ片^ニ額^ニ。俗誤^ニ為^ニ左^ニ折^ニ右^ニ折^ニ

○雜類 衣服

補 舊苔キウタイの袖スデの従

平家物語。舊苔キウタイの袖スデをぬくに従スとあり

或曰舊苔キウタイれ袖スデは非なり。求衣キウタイと書カクく。

求衣キウタイハ門跡セキガタ方の服フシなり

○雜類 藥種

補 香カウのけぐりり従

俗説云。香カウ紙シ因シふは神代カムヤマトよりあり長久年中。

石首セキシユといふもの本細ホコして香カウをふめたるといふと。

花ハナと院インより免マクくおされくか

今梅イメふ。神代カムヤマトより香カウあり事コト伝ツタへり。石首セキシユ

本細ホコして香カウ紙シをたし事コト因シふ及ツキつて虎コ因シ

が異イ制セイ庭訓テイキン。名香ナカウハ本朝ホンチャウ天平年中ヘイペイナウ。従ス

百濟ハクセイ國始テコウケキスト貢獻コウケン之ヲと云イハふ。それを證シユウとす

べあり

○雜類 食物

補 餅モチをからんとつツ従

俗説云婦女のあそびに餅モチをからんとつツとあり

ひの早カン魁ガイれと云イハふ。土民ツミ多タ能ノ因シは師シををの

ふ。秋アキをよほせと云イハふ。あそび地チよりあそび土民ツミ

を考へて。倭寇の非と知ぐ。

肥後宇土郡宮庄ニ能
因住居跡アリ古曾部村

卜云系圖袋草子並曰缺因初名永愷補文章生亦
為肥後進士剃髮号古曾部入道称融因又改能因

○雜類 居處

補相摸圓曾我屋敷の從

俗説云相模國曾我里。乃我兄才が屋敷あり。其所の竹林なり。五尺四方の石あり。ける。五郎時致が足跡とてあり。相傳ふ時致、病あり。ぬして百餘日。乃く平復。力量芳あり。とてふみし。とや。あつちのゆびは法蓮まであり。と。兄ゆり常人の足はうへふなり。入るのわたりれ。と。五郎が復讐言の事と祈り。とてい傳へて。砂の

跡甚大魏咸熙二年二月大人見襄武縣跡三
尺三寸。水經曰。華嶽巨壘平湯脚蹋開而
為兩。今掌足之跡。仍存。華嶽又曰廣武馬蹄
谷盤石上馬跡若踐日本にても抗跡よ。又沙の日本にても抗跡よ。事文類聚曰。陝西行都司鳴
沙山沙州南沙如乾糖。天氣清朗時沙鳴
聞於城內。其沙或隨人足而墜。經宿復還於
山上。とあり。小同。

○雜類 禽獸

補 蒙貴を猫といふ後

俗乃蒙貴ハ猫の異名とぞといふ者あり

今按ふ。小別物なり。事言曰。蒙貴狀如猯。小紫
黑色。畜之。捕鼠甚。干猫と云々。

○雜類 魚蟲

補 硯の中より龍出る後

俗從云。武州金澤。一寺あり。住持硯と云。硯と
あり。日大雨の。硯破。龍あり。と云。奇異雜談
今按ふ。小瑯環記曰。水仙子恒弄一圓石如鳥
卵。色類玉。一日忽大風雨。其石裂破。有一虫
走出。就硯池。飲少水。無風飛去。蓋龍也。と

ありふり

○雜類 草木

補 梅を本母といふ

俗間云傳くく出處をたづねふ多し

今按るに湖海新聞曰。北朝山濤字致遠。赴召。宋神宗問曰。卿自山路來。上曰。自山路來。本公本母如何。濤云。本公正傲。歲本母正含春。本公松也。本母梅也。稱旨。除中書。とく

補 日本の海棠乃從

俗間云海棠とみづくふ本あり

今按るふりくくいづる海棠とは別なり
壺中贅録曰。世謂海棠無香。西蜀潼川府路所屬昌州海棠獨有香。成都人謂海棠為花尊貴之也。延中筆記曰。四州重慶府海棠香。因在大足縣海棠此地產者獨有香。鶴林玉露曰。洛陽人謂牡丹為花。成都人謂海棠為花尊貴之也。花譜曰。蜀中海棠皆有名。無香。昌州海棠有香。其本合抱。海棠花盛於蜀。而秦中次之。蓋其株修然如

出塵高步俯視衆芳有超群絕類之勢。而其花之盛豐葉甚茂枝甚柔望之甚都綽約如處女とあり。唐乃相賈ハ百花譜とあり。海棠をとりて花中の神仙と云。玄宗皇帝ハ楊貴妃をとりて海棠乃眠より比とあり。海棠の衆花より超るる花と云。日本に云々海棠と云ふこと本に云々あると云。花なり。古老曰。日本に海棠なり。世上に海棠と云ふ人林檎の雄樹あり。雌樹ハ花ありて實云々結ぶ。雄樹ハ花の云々実と云。たもあらんし

補 女郎花の從

俗説云小野村風ハハ城田ハ幡の人なり其妻夫が落情を恨て着る所乃屋敷と云。色のさぬを衣れと云。市金所をハ幡川と云。投りりりる金所の衣地ハ落と云。て草と云。世云男ハの女郎花と云。なり

本朝列女傳引靈鬼志曰。何文漢人也有一女子容貌甚美卒死葬之明日見其墓盡成菊花名菊花女亦名女郎花

綱目曰。菊花一名節花一名白花一名女花一名女莖とあり。又。靈鬼志にあり。女郎花ハ菊花なり。日本に云々女莖と云。別也

考之。粧樓記詩曰。木蘭。○梅村載筆曰。雄長老曰。
 用遍女郎花とあるも菊とあり。小野頼風といふもの。公卿補任おもふべきなり。
 ねそくは霊鬼志乃伝を。日本の事と云ふ
 ものなり。

廣益俗説辨殘編四十四終

廣益俗説辨殘編四十五 補 遺 目 録

○ 雜 類 俗 書

補 吳越軍の伝

補 波羅奈國沙門の伝

補 竹枯ふ伝

補 長八丈の鬼が伝

○ 雜 類 俗 謡

補 伊勢三橋一鰐分身の伝

補 りんごれさろくが伝

廣益俗說辨殘編四十五

肥後隈本

○雜類

補

太平記曰越王勾コウ喑アム

土^{ツチ}の牢^{こゝろ}

る

を

姑蘓地

聖子圖

くねとみく獄の中へまげ入る。勾賤あやしを
まてて魚乃腹とあやして見たり。西伯囚^{セイハク}姜里^{トラスレ}。
重耳走翟^{チキニ}。皆以^{テナレリ}為^ニ王^ヲ霸^ヲ。莫^レ死^シ許^ニ敵^トとて書
しりける。筆の勢^ヒ文章の辞^ヒまづづもまた范
蠡^{カシ}がまざたりとんやみくし。彼^{カシ}いふとて世
うたがう。我^ハをみく^ハ肺肝^{ハイカン}をほく^ハまりや。
うのちうとて^ハのやど。あふれとみぬのりも
まぐろ。そのり呉王^ハ石麻^{シマ}をみりて命^ハを
たもけ^ハ。越王^ハ帰^リとるふ。呉王^ハ夫^フ差^サより
使^ハを^ハ。越王^ハ后^{セイ}西施^シとら^ハとみくし。是非^{セイヒ}

なく西施を呉國へどねく^ハ。西施ハ小麻^{シマ}
の角^{ツカ}乃^ハ朱^{ツカ}の同^トと^ハつ^ハ終^ハぐ^ハ中^ハと^ハさ^ハあ^ハ。
いま^ハ幼^ハと^ハ太^ハ子^ハ王^ハ龜^{フウ}與^{セキ}を^ハも^ハう^ハと^ハさ^ハ。
く呉國^ハよ^ハみ^ハじ^ハき^ハく^ハふ。呉王^ハ西施^ハを^ハ名^ハめ
み^ハれて。困^ハと^ハ終^ハ人^ハと^ハじ^ハと。新^{シン}誅^{シュ}長^{チヤウ}伍^ゴ子^シ胥^コ
を^ハと^ハつ^ハと^ハい^ハ。終^ハ越王^ハの^ハと^ハみ^ハく^ハ滅^ハされ。西
施^ハい^ハと^ハび^ハ越王^ハ乃^ハ宮^ハと^ハ入^ハと^ハり

今^ハ按^ハと^ハ。范^{バン}蠡^{レイ}が^ハ魚^ハの^ハ腹^ハと^ハ書^ハふ^ハ入^ハと^ハり
う^ハと^ハみ^ハ。と^ハつ^ハ。陸^{リク}廣^{クワウ}微^ミ呉^ハ地^チ記^キ曰^ハ。呉^ハ餘
昧^{グアイ}之^ハ子^ハ曰^ハ僚^{リョウ}立^ハ為^ハ諸^{シュ}樊^{ハン}之^ハ子^ハ公^{コウ}子^シ光^{カウ}所^カ裁^セ

○述異記曰香水溪在并州俗云西施浴處人呼為脂粉塘○
 吳風錄曰吳王蓋廬作天池後青龍舟日與西施為嬉
 其後吳滅蠡復取西施乘扁舟遊五湖而不
 返○越絕書曰西施亡吳國後歸范蠡同泛
 五湖而去とあるなり終る

補 波羅奈國沙門が従

大史記曰天竺波羅奈國の大王は舎利王に
 ありとてそのころ名あり沙門を請ふ。沙門勅
 してふふふふふ。折て帝國基々々々傳奏
 あり。沙門衆内の由伝奏と。帝基々々々を
 いれく國の事あり。利基のふつとて截と

い々々々傳奏國ありて。彼僧を禁門乃
 外へ出さず首級刻々。基々々々て帝沙
 門を召々々。典獄乃官勅はうをく首と
 切りやれ。帝之い々々。傳奏を三族
 乃刑にねとまひぬ。てけ沙門罪ありて
 死刑ありふへ。唯事にわづ。衆生の宿業
 かりてやむ。其故を阿羅漢問。阿羅
 漢七日があて定入。宿命通を得て過
 現とるふ。沙門が衆生は田まゝて耕作と
 業とて。帝の衆生は畦たり。田まゝを

因縁久とそあやまりて彌のうれと蛙う
 くびを切るるは因果よりく回まの沙
 門とせし蛙は波羅奈回乃大とすれあや
 まりて死罪をねるるはくくあをれあ
 々移るふは況ハ西陽雜俎曰沙門杯渡入
 梁武帝召之方要棋呼殺闇者誤聽殺
 之浮休子曰梁有楹頭師高行神異武
 帝敬之常令中使召至陛奏楹頭師至
 帝方棋欲殺子一段應聲曰然中使人
 遽出斬之帝基罷命師入中使曰向者陛

下令殺已之矣。師臨死曰我無罪前生為
 沙弥誤鋤殺一甥帝時為甥今此報也。この
 妄誕を又あやまりて
 賛とんあえ
 考ふる

補 竹枝歌

太平紀云神功皇后三韓征伐の事を記して
 云ふ福列の呉元輔王乙が五王朝へわくく
 詩よもけとみ賜ふ。日本狂奴亂沸東將軍
 聽變氣如虹沙頭列陣烽煙晴夜半鏖兵
 海水紅筆律按歌吹落月獨離盛酒飲清

風何時截盡南山竹。細寫當年殺賊功。この
詩のさうよはあておろす。日本一列は迎年
竹乃皆枯矣。ふもあくる年の新表とてやわん
とやがはるまき竹まや

今按ふよりうれんが截盡南山竹と詩
はくりうにうて日本の竹うくとつるハ愚
昧のありき。うて場より竹ハ六十年に及で枯
ふ事あり候。鯖録曰。竹生花其年便枯。六
十年一易根。必結實而枯死。實落土復生。
六年還成所也。竹譜曰。竹不剛不柔。非草

非木。枯必六十年復亦六年見也。とあるハ
考べ

補 長ハ丈の鬼が伝

年代記云。大寶四年丁未。長ハ丈横一丈二尺
一頭。三面鬼本

今按。續日本紀以下。乃諸實録よりて
る。と信する。とあるハ

○ 雜類 俗語

補 伊勢三輪一體分身乃現

三輪の謠。伊勢と三輪の神一體分

所のゆき。又いふ女とてとて悔の神

今抄より三輪所祀大己貴命ハ素盞馬尊

ろ子に。天照皇太神と一體にあらむ。男

神と女神とあらむ。いふなり。なすくあや

まひるまると考ふ。倭姫世紀曰。崇神天皇

五十八年辛巳遷倭弥和三室嶺上宮二年

奉齋。太神宮儀式帳曰。内宮美和乃御

諸原。造齋宮齋始奉。又いふにけとれた

天照太神宮とて移す。まひるまひるあま

を同くして一體分所とてさるるもの成り

補

いふことゝのさるゝが從

二人

静の謠。いふことゝれさるゝのたゝ身を

とて

俗間はて

今抄より。さるゝいふ大に。依國あり。大江系圖を

考ふ。依國ハ朝綱が曾孫なり。東見記

を考ふ。依國ハ播磨ハ諸越ハ考ふ。予

聞諸播磨土人諸越在賀西郡。今魏依

國村。洛陽といふ。葛野郡金宗寺の向。依國が宅の所なり。

一書曰。證據は師。依國天姓。たをた。其賦とる

不。詩。多くいふを賞なり。晚年吟曰。六十

餘回者不足他生定作愛花人此詩より
多。後人附會してつく。依國没後その子に
爰よりていつく。けさ命のつた花を毫
さう情みしう。蝶とて春ふ花園
わさぐとさう。其子よりつた花に蜜ふぬ
こそ蝶より供とといひ傳ふ。それと花み身
をすてうりや。つたのたう。やう。は
依國を音ふし。み諸越。唐土よりとらぐ。
異邦人ともやうあり。因思癸辛雜識
曰。楊昊字明之娶江氏少艾連歲得子明之

客死之明日有蝴蝶大如掌。翩翩於江氏傍。
竟日乃去。及月計聚族而哭。其蝶復來繞
江氏飲食起居不去。蓋明之未能割慈於
少妻稚子故化蝶以歸。宋高僧傳曰。釋
道賢造死焚之火聚中盡化金色胡蝶。
而飛去。大著聞集。女の尸火葬
のとき黄蝶とたう。狐のこ くのそつひ。
和漢同月乃妄誕なり

俗書より。俗謡より。つたところ。事實とあや
まらふところ。餘は終編に載べ

百代垂統乃祖たりはなり人をりて人を
速く。あつたに陰陽界降をみく談じり
に。偏一東坡が醉来黒漆屏風上草寫
盧仝月蝕詩と。賦せしむくかときく
贅し。わくのうに僻解童蒙乃惑と成
べたれ。已ては得てこれと年と若そ
ま神道よ志あつてく師をりて先て。は
ちりきふべし。あつたに。他日燭と秉て。
夜ゆくの朝を得ん。あつてきけ。他水
のうにいそくともみぬまげ。底のなり

と老るるなり

○又同一書少彦名大己貴乃新推て我
國に忌を給へ唐薬どもの末ね也よりなり
あつたに何もの書ふなりや

答云神代考より大己貴少彦名命定療
病の方よりなりぬまき。唐薬を新に
我國に忌給へし事。この書五國史諸神
書よりなりぬまき

○又同一書より三寶荒神に福祿壽なりと火
幸神とくべしやなりぬま何

○又同大社中社小社の次第なり

○又問兩部習念ハ何の如く修す

上

らるるを後^コ金胎^{タイ}お部^部と習^シ合^{カウ}とてその
不^不換^換二字^二の^の聖武^聖の詔^詔書^書より始^始まることあり

○又同神道を学ぶ者^者書紙^紙情^情くよるば理^理
不^不精^精とてそのありぬ何^何

若^若云^云大^大非^非なり。いふへ舎^舎人^人親王^{親王}とて先

一條^{一條}兼良^{兼良}公^公北畠^{北畠}親房^{親房}卿^卿近代^{近代}出口^{出口}延佳^{延佳}

山^山崎^崎垂加^{垂加}等^等各^各情^情識^識の人^人あり神道^{神道}

志^志と者^者いふつあも秘^秘く神書^{神書}と宛^宛め情^情く

經^經史^史少^少も涉^涉かべて志^志くざれはあつて

通^通せりなり聲^聲あり昔^昔侯^侯道^道華^華といふ道^道

士^士好^好子^子史^史手^手不^不釋^釋卷^卷嘗^嘗曰^曰天上^{天上}愚^愚悞^悞なり

人^人か^かい^いし秘^秘き^き事^事五^五色^色線^線よりいふ況^況や

我^我東^東方^方君^君子^子因^因るんぞ愚^愚悞^悞の神道^{神道}者^者あ

らんや

○又同中^中臣^臣稜^稜ハ神武^{神武}の神武^{神武}に作^作つて

いふ説^説いふ

若^若云^云神武^{神武}神武^{神武}に文字^{文字}あり稜^稜乃^乃内^内り

日本^{日本}紀^紀の文^文を用^用る事^事多^多々^々れは舎^舎人^人親

王^王いふは作^作るものなりと上^上古^古より文字

か^かい^い應^應神^神帝^帝神武^{神武}漢^漢字^字海^海よりいふ日本

紀纂疏朝野群載神皇正統記古語拾遺
等々々々々和字ハ天武帝十一年丙午命
境部連石積等肇俾造新字一部四十
四卷と日本紀より肇て和字と造
とありふく上ありふく然曉とる

○又同一書天津彦彦とあり天津中主尊と
こ一日清彦とい日神の清彦ありとありい
くひ一書未聞

答曰非なり鎮座本紀曰從離宮遷幸山
田原新殿奉鎮御船代御樋代之内註曰

樋代則天小宮之日坐儀也故謂天御蔭日
御蔭登隱座祝言縁也船代則謂天材本
屋船之靈故瑞舍名號屋船縁也天御蔭
日御蔭隱座古語也倭姫世紀曰美豆乃御
舍平造仕天御蔭日御蔭止隱坐と
あり

○又同持可々吞天牟人海神乃不淨と
粘して清浄とあると方々はとい牙を咬と
く三度嚙吞といふとありいむ右同
答云非なり神祇類聚本原曰昔者女曰此

國波鹿乃見哉毛為止白支註曰渴飲訓之
 云鹿乃見八盤訓之云哉毛為也盤土飲器
 言食飯飲水而止渴滿腹俗云八坏是也
 可々二字延喜式作哥一字者為得或曰
 從速秋津姫至依須良比失者各寄神
 號斷文義寄速秋津姫稱謂可吞寄可
 吞而謂伊吹戸主吹放寄依須良姫號
 而謂依須良比失言口速開津姫則可
 吞也開津姫可吞則氣吹戸主吹放也
 氣吹戸主吹放則依須良姫在遷也
 中臣 後義

解

此從解得の當とて謂う

○又同左主記劍卷小新羅より生不勅といふ者
 七劍を携へて日本にまゐり草薙劍とてん
 とて尾張國すそあへてを熱田明神蹴殺し
 多し彼よりてふ七振の劍と草薙劍を加へ
 寶殿に納めしころなり八劍大明神と号とて
 あらふいふ

若云生不勅が事何との書ふもくつて
 と八劍宮の事ハ神名祕書曰沙門道行
 盜取劍趣異國逢風雨不達先路有靈

威被^{ラレ}送^{タテ}熱田社自爾以降造加^{ツクリクヘテ}劍七柄^{ナ、カララ}為^スハ^ヤ劍宮^{ツルキノミヤト}とありて然^{シヨウ}とぞ

○又同りこれ劍ハ日本に及ばざらん

若^ニ云^フいづきの國とて日本に及ばざらん
は^ハか^ハ一^ニ遵生八牋^{シニセイハセシ}曰^ク自古格物之製莫^{ナシ}不^レ有^テ源傳流唯鑄劍之術不傳典籍亦不^レ載^{ノレ}故^ニ今^ニ無^ク劍客而世少^ニ名劍^ヲと嘆^クせり

○又同りこれ故に及ばざらん

若^ニ云^フ五子不知^レや日本に天璣^{テンレイ}矛の滴^{シタリ}凝^{コシ}る而^レ乃^ハ國ちり利劍^{リケン}と風^{フウ}ちよなりけ故に小國

や^ハいづも外國^{ゴク}のあそせれど文永弘安^{モンエイ、コアン}の
蒙古^{モウコ}襲^{シツヒ}来るじうども天地^{テンチ}編滿^{ヘンマン}の璣^{レイ}矛^{ホコ}に
あそてく^ハけ去^サれ餘^{ホニ}い璣^{レイ}矛^{ホコ}記^キよらん
のせりあそせり故に

右十二件依友人之間^ニ答^{コタ}ふ

○又同俗説并は書のものなり

若^ニ云^フ他日終編をあらわらん

廣益俗說辨義編四十五終

記于殘編俗說粹之尾

西域之舍利見碎於傳奕之槌
我朝之俗說見破於不肖之粹
雖事物異其類共是不快意乎
嚮著正後遺附編今也殘編既

脫稿若夫他日所出之俗說猶
待終編之筆于机上

享保壬寅之春

細川越中守宣紀武臣鳥鉸首

井澤十郎左衛門長秀

廣益俗說辨正編二十一冊

同後編五冊

同遺編五冊

同附編七冊

同殘編八冊合四十六卷版行出来

同終編未刻



文化九壬申晚冬求版

浪華心齋橋通北久太郎町

書林 加賀屋善藏梓

